

# 中原中也記念館 館報 2024

29

Public relations magazine  
第29号

【特別寄稿】

## 中也、死児の見る夢

上野 修

## 雪が止む時

——第二の故郷、石川県金沢市——

マーサ・ナカムラ

【テーマ展示】

空の歌

【特別企画展】

草野心平と中原中也

【企画展ピックアップ】

中原中也と関東大震災  
中也と短歌

【記念館ニュース】

入館者80万人達成！  
第8回ぼうしの詩人賞  
中也忌  
開館30周年記念事業

【新収蔵資料紹介】

野々上慶一宛 献呈署名入り翻訳詩集『ランボオ詩集』  
島木健作宛 献呈署名入り詩集『山羊の歌』

【主なできごと】(2023年度行事記録)

第29回中原中也賞  
2024年度行事記録

# 中也、死児の見る夢

上野 修

ある十七世紀の哲学者が、あらましこんなことを書いています。——私はスペインのあつる詩人の話を人から聞いたことがある。この詩人はあるとき病に襲われ、回復したあと自分の過去の人生をまったく忘却したままだった。自分の書いた作品を自分のものと信じられなかったというのである。もし母語まで忘れてしまっていたならば、大人の姿をした赤ん坊と見なされたことであろう。

哲学者は続ける。——このように、身体は生きている特徴を保ったままでもまったく別なものへと変異することができる。だから死ぬのは死体に変化する場合だけとは限らない。かつての詩人は死に、そのことを知らずに死後を生きている。信じがたいと言わずに赤ん坊はどうなるのか。大人になった人間は赤ん坊の本性と自分の本性があまりに違うので、他人たちをもとに推論する機会がなかったなら自分がかつて赤ん坊だったなどと、とうてい納得できないであろう（スピノザ『エチカ』第四部定理三九の備考）。

かつての赤ん坊は死に、そのことを知らずに大人として生きている。不思議な一節

だが、読んでいて私はふと中原中也の詩について何かがわかった気がした。——私たちはもう死んでいてずっと夢を見ている。知らないうちに死んでいるので、夢はこんなにリアルなのだ。中也はそんな感覚を持っていたのではないか。

そういうえば中也の詩には死児の気配が充滿している。

枝々の 拱くみあはすあたりかなしげの  
空は死児等の亡霊にみち まばたきぬ

「含羞」より

お、チルシスとアマントが  
こそこそ話してゐる間

森の中では死んだ子が  
蛍のやうに蹲すんでる

「月光 その二」より

中也は七歳で弟を亡くし、みずからの死の前年に最初の子どもを亡くしている。そうした喪失体験の反映であろうくらいに私は思っていた。しかし、もしかするとそうで

はないのかもしれない。死児の偏在は死者の追慕などといったものではなくて、むしろ中也のしている世界が死児のしている夢であるということではないか。

こんな奇怪な考えが頭をよぎったのは、ちょうどそのころ中也の「夜汽車の食堂」という作品に出会っていたからかもしれない。

ちよつと賢治の「銀河鉄道の夜」を思わせる、しかし格段にシニールな短編である。——雪の野原に一本のレールが、大きな月がポツカリ出ている地平線に向かって伸び、円筒形の巨大な列車が星に向かってロケットのように驀進ぼくしんしている。その食堂車の明るい内部にたった一人の乗客の僕がいて、たっぷりレモンをかけて魚フライを食べようとしている。けれどもそこいるのは会計台のところ

に立っている白い上衣のしゃちこばったボーイと、ずかずか入ってきてそんなにレモンをかけて食べる人ありますかと僕の耳を引っ張るこわいアメリカの小母さんだけ。車窓から見える雪原では白熊たちがなぜか雪だるまをこしらえている。

汽車は相変らずゴーツといつて、レモンは僕の目にしみて、僕はお母さんやお父さんを離れて、かうして一人でお星の方へ旅をすることが、なんだか途方もなくつまらなくなるのでありました。

汽車はゴーツといつて、青い青い雪の原を、何時までも停まらずに走り続けました。

僕は段々睡くなつて、そのうち卓子の上に伏せつて眠りましたが、するとお庭の縁側のそばの、陽を浴びた石の上で、尾を立てたり下ろしたりしてゐる、プチ公（犬の名）の夢を見るのでした。女中ねいぢやはこれから郵便局に、手紙は出しに行つて来ると云ふのでした。

「夜汽車の食堂」より

「銀河鉄道の夜」を引かなくとも、この夜汽車が死後の世界を走り続けているのは明らかである。すでに死んだ「僕」は夢を見る。それはどこか懐かしい、縁側近くで犬のプチ公が尾を立てたり下ろしたりし、女中の声が聞こえてくるいつもの光景である。失われたその懐かしい日常に死児は夢



の中で帰って来、すべてがいつものようにあるのを見る。見ているのは「僕」、すでに死んでいる幼い中也である。



中原中也原稿  
「夜汽車の食堂」1枚目

そんなふうと考えていくと、中也に取り憑いているイメージの一つ、あの菜の花畑に遺棄されたように眠っている赤ん坊は死児ではないかと思えてくる。

菜の花畑で眠つてゐるのは……

菜の花畑で吹かれてゐるのは……

赤ん坊ではないでせうか？

いいえ、空で鳴るのは、電線です電線ですひねもす、空で鳴るのは、あれは電線です菜の花畑に眠つてゐるのは、赤ん坊です  
ど

走つてゆくのは、自転車々々々  
向ふの道を、走つてゆくのは

薄桃色の、風を切つて……

薄桃色の、風を切つて

走つてゆくのは菜の花畑や空の白雲しろくも

——赤ん坊を畑に置いて

「春と赤ん坊」

菜の花畑の中に死児は眠る。空で鳴る電線、無人のように走つてゆく自転車、一面の菜の花、空、白雲。そして薄桃色の風、この風景が異様に美しいのは、死児の夢見る世界だからだ。赤ん坊は死にながら夢を見ている。そうとしか思えない。

ずっと以前、現代詩を読みあさっていた一

〇代の頃は、中原中也のそんな凄惨なところにはまったく気づかなかつた。正直なところちよつと古臭くてナイーヴすぎるように感じられ、中也詩集は端っこの方にやられていたように思う。だがここ山口に来て、ときに不安にさせるほどに美しい空の下で久しく暮らすうちにこの詩人の視覚に侵されたのだろう。私は中原中也がほかの詩人とちがって、いきなり世界の中から歌い出すことのできる稀有な詩人であることを知るようになった。ただ、どうしてそんなことができるのかはわからないでいた。その秘密が少し見えてきたのである。

中也の視覚は死児の見る夢である。ひとまずそう考えてみる。緑側の陽を浴びた石の上で尾を立てたり下ろしたりしているプチ公のように、そのような視覚は失われた

記憶と区別がつかない。きつと中也はその

ようなものとして世界を見ていて、だからこそその世界は胸を締め付けるほどに遠く、

そして懐かしい。夢の中で、死児は自分が死んでいることに気づいてはならない。菜の花畑の赤ん坊はそのまどろみの中にいる。

だが、私たちが夢の中でこれは夢かもしれないと気づくことがあるように、死児は自分が死んでいることに気づきそうになる。

中也の詩にはそういう不穏な緊張に満ちた視覚がある。

黝あせくろい石に夏の日が照りつけ、

庭の地面が、朱色に睡つてゐた。

地平の果に蒸気が立つて、

世の亡ぶ、兆きざしのやうだつた。

麦田には風が低く打ち、

おぼろで、灰色だつた。

翔びゆく雲の落とす影のやうに、

田の面おもを過ぎる、昔の巨人の姿——

夏の日の午過ぎ時刻

誰彼の午睡ひるねするとき、

私は野原を走つて行つた……

私は希望を唇に噛みつぶして

私はギロギロする目で諦めてゐた……

噫、生きてゐた、私は生きてゐた！

「少年時」

「噫、生きてゐた、私は生きてゐた！」は

思春期の苦悩とか、少年の生きている実感のようなものだろうくらいにかつての私は

思つていた。だがそうではない。思春期の思

い出なんかではない。むしろ……この現実

はずで失われていて、本当は帰つてこれ

るはずがない場所なのだという不穏な気づ

き、今また切迫してくる叫びのように聞こ

える。「私は希望を唇に噛みつぶして／私は

ギロギロする目で諦めてゐた」。じつさい、

すでに死んでいる者に、いつたいいかなる

希望が許されているというのか。私にはこ

のとき、詩人が自身の視覚の秘密に気づい

てしまうぎりぎりのところにいる気がする。

もう死んでいて本当は帰つてこれないはずのところにいる。そんな不安感じがする

風景が中也にはしばしば出てくる。思い

つくままにあげても、落ちてくるボタンを

拾う「月夜の浜辺」がそうだし、人魚のいな

い「北の海」、「思ひ出」のあの岬の先の煉瓦

工場もそうである。「盲目の秋」で目の前に

広がるあの風景も。

風が立ち、浪が騒ぎ、

無限のまへに腕を振る。

もう永遠に帰らないことを思つて

酷薄な嘆息するのも幾たびであらう……

「盲目の秋」より

喪失の風景であることは間違いない。だ

が、何かが失われている風景ではない。その

風景そのものが失われた風景のように広がっている。失われてほんとうはもう見ることができないはずの光景を見ている——中世の風景はどれもそんな感じを抱かせる。そういう中世は死んでしまっている自分が登場する詩をいくつも書いています。

『ええさうよ。——死ぬつてことが分つてゐたのだから？』

星をみると、星が僕になるんだなんて笑つてたわよ、たつた先達よ。

.....  
たつた先達よ、自分の下駄を、これあつても僕のおぢやないつていふのよ。』

「秋」より

「あの笑ひがどうも、生きてる者のやうぢやあなかつたあね。／＼彼奴の目は、沼の水が澄んだ時かなんかのやうな色をしていたあね。そんなふうの思い出されているのは中也である。

これは遠くない死の先取や予感などというものは別だろう。中世の場合、いつか死ぬ、ではなく、もう死んでいることを思い出す、あるいは思い出しそうになる。

外では今宵、木の葉がそよぐ。  
はるかな気持の、春の宵だ。  
そして私は、静かに死ぬる、  
坐つたまんまで、死んでゆくのだ。

「わが半生」より

こんなふうに見てくると、やはり中世には死が見ている夢という感じがどこかにあつたのではないかと思いたくなる。たとえば「曇つた秋」という詩篇の「君のそのパイクの、／＼汚れ方だの焼け方だの、／＼僕はいやほどよく知つてるが、／＼気味の悪い程鮮明に、僕はそいつを知つてるのだが……」と始まる連。「今宵ランプはポトポト燻<sup>か</sup>り」というリフレインの中で死と生は限りなく接触しそうになる。

今宵私の命はかゞり

君と僕との命はかゞり、

僕等の命も煙草のやうに

どんどん燃えてゆくときや思へない

まことに印象の鮮明といふこと

我等の記憶、謂はば我々の命の足跡が

あんまりまざまざとしてゐるといふことは

いつたいどういふことなのであらうか

こうして夜が更けていくと、唐突に前半と無関係に見える大人と幼児らしきものと  
の会話がカタカナで始まる。

コホロギガ、ナイテ、キマス

シウシン ラツバガ、ナツテ、キマス

デンシヤハ、マダマダ、ウゴイテ、キマス

クサキモ、ネムル、ウシミツドキデス

イイエ、マダデス、ウシミツドキハ

コレカラ、ニジカン、タツテカラデス

ソレデハ、ボーヤハ、マダオキテキテイイ

デスカ

イイエ、ボーヤハ、ハヤクネルノデス

「曇つた秋」より

語らひは続き、「デンシヤハ、マダマダ、ウゴイテ、キマス／＼ウシミツドキデハ、マダナイデスネ／＼ハリ」で途切れる不思議な詩である。どうしてこんな構成になっているのか長らく首を傾げていたのだが、おそらく鍵は「ボーヤ」にある。死と生の接触するところ、そこに「ボーヤ」が目覚まして現れ、語り始めるのだ。



中原中也原稿  
「曇つた秋」5枚目

今になって思うと、死者が見ている夢というこんな変な考えが浮かぶきっかけになつたのは、以前、中原中也記念館で見た山根秀信の絵画シリーズ「長門峡」だったかもしれない。もちろん中世晩年の詩「冬の長門峡」をモチーフにしたものである。数枚が並ぶそれは実に美しくも不気味なもので、モ

ノクロームの長門峡の岩間の水流や水面だけが、ほとんどす黒いと言つてよいようなべっとりした暗紫色の色調の中に燐光を帯びるようにしてほんやり浮かび上がっている。山根さんは山口在住の画家で、あとでお会いしたときに、いやあ、なんだか死んだ人が思い出して見ている風景みたいですねえ、と感想を述べたことを思い出す。

長門峡に、水は流れてありにけり。

寒い寒い日なりき。

われは料亭にありぬ。

酒酌みてありぬ。

われのほか別に、

客とてもなかりけり。

水は、恰も魂あるものの如く、

流れ流れてありにけり。

やがても密柑の如き夕陽、

欄干にこぼれたり。

あゝ！——そのやうな時もありき、

寒い寒い 日なりき。

「冬の長門峡」

死んだ人が思い出して見ている夢。ほんとうにそう思えたのである。昔の写真はネガというのがあつた。古道具屋で見つけた写真機にフィルムが残っていて、ために赤色光の暗室の中で現像してみるとおぼろ





平成 18 年度企画展Ⅱ  
「中原中也・詩の情景／絵画の情景 あ、？ - 山根秀信展」展示風景



山根秀信「長門峡2」  
(2006年 作家蔵)

げな風景が誰かの記憶のように浮かび上がってくる。ちよんどもそんなふうな感じがした。「あ、！——そのやうな時もありき、／寒い寒い 日なりき」。

「冬の長門峡」は一九三六年十二月、幼い長男文也が逝ったすぐあとに書かれている。未発表詩「夏の夜の博覧会はかなしからずや」がこれとほぼ同時に書かれたことは中原中也記念館の企画展ではじめて知った。ちよんと意外でびっくりしたのだが、というのも、冬の長門峡の寒々とした記憶と、坊やを連れて妻と上野の博覧会に行った夏の思い出が、中野の中でどのように連なっていたのか不思議に思ったからである。けれども、そのころ中野が精神に変調をきたす

ほど強烈に、すべてを見てきた死児の目に同一化しつつかつたとするならそれもわかないではない。  
博覧会から出たあと詩人は坊やと不忍ノ池を見る。

三人博覧会を出でぬかなしからずや  
不忍ノ池の前に立ちぬ、坊や眺めてありぬ

そは坊やの見し、水の中にて最も大なるものなりき、かなしからずや、  
髪毛風に吹かれつ  
見てありぬ、見てありぬ、

「見てありぬ、見てありぬ」——しかしそれがその風景を見ているのか。死んだ坊やなの

か、詩人なのか……。続く次の連は同一化の極限を見る気がする。夕暮の空、彼らに乗せた飛行機は廻旋し、恐ろしくも美しい光景が一挙に迫ってくる。

われら三人<sup>みたり</sup>飛行機にのりぬ  
例の廻旋する飛行機にのりぬ

飛行機の夕空にめぐれば、  
四圍の燈光また夕空にめぐりぬ

夕空は、紺青の色なりき  
燈光は、貝釦の色なりき

その時よ、坊や見てありぬ  
その時よ、めぐる釦を

その時よ、坊やみてありぬ  
その時よ、紺青の空！

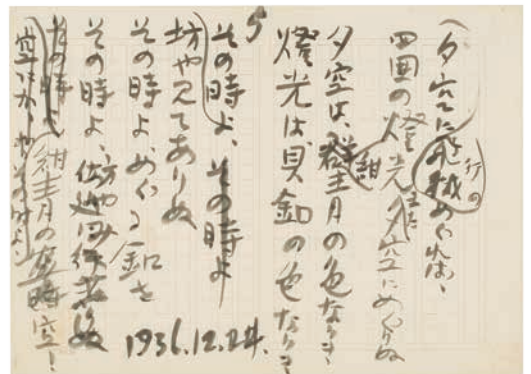
「夏の夜の博覧会はかなしからずや」より

白状するが、この「夏の夜の博覧会はかなしからずや」という詩を読むとき、私はきまつて胸を締め付けられるような切迫を覚えすにはいられない。思うに、これは子供を失った喪失の哀しみの詩なんかではない。うまく言えないが、帰れるはずのない現実を死児の目で見えるように見させる詩、死んでいることを知っている死児の、すみずみまで覚醒した夢そのものではないか。

あ、！——そのやうな時もありき。

## 上野 修 (うへの・おさむ)

京都生まれ。西洋近世哲学の研究者(大阪大学名誉教授)。2004年に大阪に移るまでの13年間、山口大学で教える。著書に「スピノザの世界——神あるいは自然」(講談社現代新書、2005年)など。刊行中の岩波スピノザ全集の編著者。山口市在住。



中原中也原稿  
「夏の夜の博覧会はかなしからずや」5枚目

# 雪が止む時

## ——第二の故郷、石川県金沢市——

マーサ・ナカムラ

石川県金沢市の「神明宮」という神社にある、大げやきの下に立った時、風が吹くような、不思議な感覚になったことが印象深い。二〇一七年十月のことだ。あれからまもなく七年も経とうとしているのに、中原中也という名を聞くと、今でも大げやきを見上げて、一人ぼんやり立っていた時

のことを思い出す。

女友達の結婚式に出席することになり、埼玉県から新幹線に乗って、金沢市街を一人ぶらぶら歩いていた。車を借りていた訳でもなかったため、市内バスに乗って、適当な場所で降りて散歩していた。舗装された綺麗な道の脇に、「神明宮」と

彫られた石門を見た。一度通り過ぎたが、なんとなく心惹かれて、引き返してその門をくぐった。「二十代の女が一人で、縁もゆかりもない神社をわざわざ詣でるのは変だ」とは思った。それでも、紐で引かれるように、ぐいぐいと足を進めて行った。その先に、その大げやきがあった。

立派な大げやきだ。神社のお社を覆ってしまふような、アンバランスなほど大きい。薄手のコートを羽織っていても、体が冷えるくらいにの気候だったが、青々とした枝葉が、まるで松ぼっくりのように放射線状に広がっていた。その大木を「パワースポット」と銘打つ立て看板に、「中原中也」という名前を見つけたのだった。

大正時代初期に、この神明宮の大げやきの下で軽業興行が催され、当時金沢市内にあった北陸幼稚園の園児だった中也は、この場所で今というサーカスを見たのだ。

私はその立て看板を、何度も読み返した。見間違っているかと思っただけだ。中原中也の故郷は山口県だったはず。北陸地方の石川県で幼少期を過ごしたはずがない。それが、何度読み返して



神明宮（神明宮ウェブサイトより）



神明宮の大げやき（神明宮ウェブサイトより）



も、そのように書いてある。中原中也の代表詩の一つ『サーカス』は、この場所で見た軽業興行の印象がヒントになったとまで書いてあった。

立て看板を制作した人の勘違いすら疑い、ス

マートフォンで調べてみると、本当だった。中原中也は五歳の時から二年間ほど、石川県金沢市で暮らしていたのだという。

当時の私にとって、中原中也は詩人以上の存在

だった。若手詩人の登竜門である、中原中也賞の存在があった。その時私は、自分の第一詩集の刊行を目前に控えていた。もちろん、自費出版だ。社会人三年目の自分にとっては、金の無駄遣いと思えない蛮行だった。それから半年後に第一詩集が中原中也賞を受賞したのだ。その大げやきが目に浮かんで、なんとも言えない、不思議な気持ちになった。

\*

故郷は、一人一つずつ与えられているものではない。

故郷はどこか、という話になった時、「自分には故郷がない感じがする」と、東京で生まれ育った人がつぶやいていたことが忘れられない。その言葉に、何人かが頷いていた。幼年期、思春期の長い時間を過ごした場所が、その人にとっての故郷とは限らない。現に私は埼玉県で生まれ育ったが、郷愁(ノスタルジー)というものを、埼玉県の実家よりも、大好きだった祖母が暮らしていた宮城県気仙沼市に強く感じる。宮城県気仙沼市に住んでいたことはない。赤ん坊の時から、お盆の時期になると、母に連れられて気仙沼市の祖母の家に帰省していた。祖母の家の前には、コンクリートで舗装されていない、湿った土が広がっていた。東北の夏の土は、薄荷に似た香りがする。少し歩けば港があり、海の上を白いうみねこが飛んでいる景色も、内陸育ち



金沢在住時代の中也一家（前列左端が中也）

の私には面白かった。宮城県気仙沼市には、楽しかった頃の記憶が詰まっている。お盆のわずかなひとときではあったが、その濃密さが、気仙沼市を第二の故郷のように思わせるのだろう。

中原中也の随筆に『金沢の思ひ出』（一九三六）という作品がある。まさに大正時代初期、中也が金沢市内で暮らしていた頃の記憶を辿ったものだ。そこに、先の神明宮の軽業興行の話も出てくる。一部引用する。「神明館」は、当時神明宮の境内にあった寄席小屋のことで、落語だけでなく、サイレント映画なども上映していたらしい。

或時神明館の横の空地に、軽業が掛かった。父に連れられて行ったのだが、父が切符を求めてゐる時、ヒヨイと僕の前に例の弁士の息子が立現れて、神明館と軽業とどっちがよいと思ふかと云ふのであった。軽業の方は明るい上に楽隊は盛んに鳴らしてゐる、所で神明館の方は仄暗く、例の昔の映写機が、憂鬱な音を立て、廻つてゐた。「こちちの方だ」といつて僕が軽業を指すと、「ちがふ、フィルムだけでも神明館の方が百倍も値打がある」といふのであった。さうかも知れぬと僕は感心したものであった。

中也の、楽しく饒舌な声が聞こえてきそうな文章だ。石川県金沢市は中也にとって、第二の故郷とも思える場所だったのかもしれない。第一の故郷である山口県での思い出をつづった随筆・散文は多数あるが、金沢時代の記憶は、両親との確執に触れておらず、珍しい雰囲気がある。金沢時代の思い出を語る中也の声に、透き通った喜びがある気がする。

『生ひ立ちの歌』という中也の詩篇がある。過酷さを増していく宿命の重みを、雪に託してうたう傑作だ。次に引用しようと思う。

## 生ひ立ちの歌

### I

幼年時

私の上に降る雪は  
真綿のやうでありました

少年時

私の上に降る雪は  
雲(みぞれ)のやうでありました

十七—十九

私の上に降る雪は  
霰(あられ)のやうに散りました

二十一—二十二

私の上に降る雪は  
電(ひま)であるかと思はれた

二十三

私の上に降る雪は  
ひどい吹雪とみえました

二十四

私の上に降る雪は  
いとしめやかにになりました……

### II

私の上に降る雪は  
花びらのやうに降ってきます  
薪の燃える音もして  
凍るみ空の黝(くろ)む頃

私の上に降る雪は  
いとなよびかになつかしく  
手を差伸べて降りました

私の上に降る雪は  
熱い額に落ちもくる  
涙のやうでありました

私の上に降る雪に  
いとねんごろに感謝して、神様に  
長生したいと祈りました

私の上に降る雪は  
いと貞潔でありました

幼年時の「私の上に降る雪は／真綿のやうでありました」という言葉は、石川県金沢市で暮らした時代の明るさを表しているようにも読める。

先に引用した『金沢の思ひ出』は、一九三二年に、二十代半ばの中也が石川県金沢市を訪れた際の、旅行記のような形式をとっている。二度と戻れぬ過去への憧憬。今は亡き弟と一緒に叱られて吊り下げられた松の木。北陸幼稚園、友達と遊んだ料亭つば甚を見に行く。幸福だった頃の自分を見物するかのよ



うな旅だ。三十歳で亡くなった中也にとって、金沢旅行をしたこの時期はすでに晩年である。ただ、彼はまだ二十代だった。私自身の感覚に当てはめるならば、二十代半ばの若さで、幼年期に過ごした場所を訪れて涙を流す中也は、すでに老成していたように思えてならない。

次に引用するのは、中也十六歳の頃の随筆である。

私が御飯の間に這入ると父と母はしてゐた話を急に止めた。私のことを話してゐたなと私は思った。

私がたつた一膳で止めて立たうとすると、祖母が腹でも悪いのかと言ひ出した。父も母も心配して何だとか彼だとか言つた。私は好い加減に胡魔化して、書齋に帰つた。

肉親は五月蝍うるぎい、と思はず、何時もながら痛感した。

そして如何かかうか余り父との言合ひが大きいことにならなかつたことをひそかに悦んだ。

〔『その頃の生活』より引用〕

山口県の実家で、両親たちと暮らしていた頃を振り返る。少年時の「糞」にあたる時代だ。「真綿」のような雪は軽やかだが、びしょびしょと水を含んだ糞混じりの雪は、中也少年の体を重たく、冷たいものにしていただろう。

中也に降り積もる宿命の雪は、まるで夜が更けるように、年を経るごとに肅々と過酷さを増していく。このままでは雪に負けてしまうのではないかと思う矢先、突如、時が止まるように、雪は静かになる。二十四「私の上に降る雪は／いとしめやかに降りました……」の言葉と共に、パート「I」として区切られた時代が終わる。

パート「II」の箇所から、中也の晩年は始まった

のだろう。パート「II」が二十四歳より後の頃を語っているであろうことを考えると、それは先に述べた、二十代半ばに敢行した金沢市再訪がちょうどその契機であったようにも思える。

「私の上に降る雪は／花びらのやうに降ってきます／薪の燃える音もして」

「私の上に降る雪は／熱い額に落ちもくる／涙のやうでありました」

「私の上に降る雪に／いとねんごろに感謝して、神様に／長生したいと祈りました」

降る雪に、散華の美しさを見る。降りかかる宿命の災禍すら、神が自分に与えた生の祝福であったとも言ふような凄みがある。降雪の寒さに震えながら、人を温める薪の音に思いを馳せているのは、どんな時でも自分を愛してくれた肉親への思いの、雪解けの瞬間だったようにも感じられる。

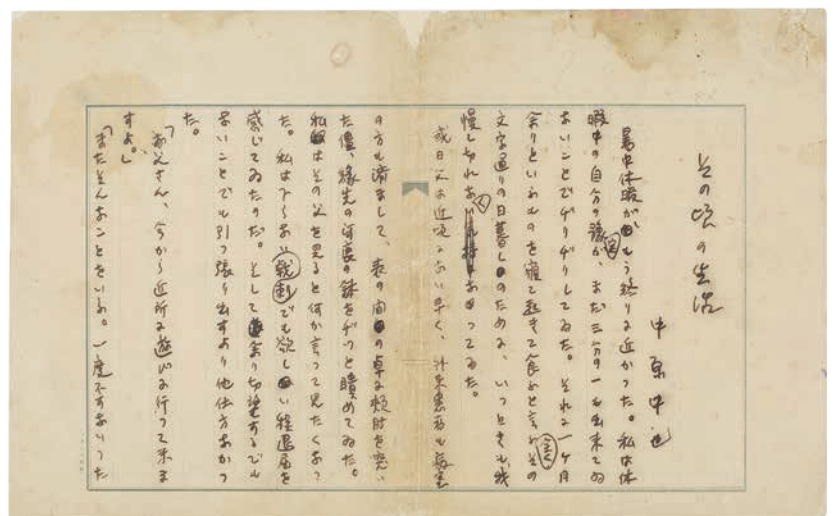
この詩を締めくくるのは、次の詩句である。  
「私の上に降る雪は／いと貞潔でありました」

中原中也は一九三七年、三十歳で生涯を閉じている。同時代の、長生きをした詩人の中には、自作詩の朗読をする肉声が残っている人もいる。中也は朗読が得意だったというのは、有名な話だ。音声、映像が何も残っていないという事実には、中也夭折の悲しみを改めて感じる。

もし中也が望み通り「長生」きしていたら、雪の様子には、それからどのように変化したのだろうか。

その様子を見たかった。ただ、止むことのない雪を「貞潔」と締めくくった中也は、生きていく意味を、悟ってしまったのだと思う。

そして、雪は止んだのだ。



中原中也原稿「その頃の生活」1枚目

## マーサ・ナカムラ

詩人。1990年10月6日生まれ。埼玉県松伏町出身。2014年より『現代詩手帖』への投稿を始め、2016年に第54回現代詩手帖賞受賞。2018年に第一詩集『狸の匣』で第23回中原中也賞を受賞、2020年に第二詩集『雨をよぶ灯台』で第28回萩原朔太郎賞を史上最年少で受賞。2021年に第8回早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞を受賞。現在は月刊誌『望星』（東海教育研究所）で、おすすめの現代詩をエッセイ形式で紹介する『詩のとびら』を隔月連載中。

第21回テーマ展示

# 空の歌

《会期》

令和6年2月15日(木)～  
令和7年2月11日(火・祝)

中原中也の詩の中には、「空」が多く登場します。中也は自然現象に自らの心情を重ねて表現することが多く、天候や時の流れとともに、表情豊かな空の情景が表現されています。「空」には死者の魂や「黒い旗」といったイメージが重ねられ、詩的なイメージの源でもありました。

また、空に向けて懺悔したり、神を呼んだり、自己の苦しみを嘆くなど、中也にとって「空」とは、人知を超えた、崇高なもの象徴でした。

本展では中也の詩の重要なモチーフである「空」について、様々な視点から紹介しました。

## 展示1 さまざまな「空」

中也の詩には、「青空」「曇り空」「夕空」「夜空」など、様々な「空」が登場します。そこには、移りゆく時の流れや四季折々の実感が個性豊かな言葉で描かれ、空をみつめる中也の鋭い観察眼が光っています。

また、「空」は、ときに中也の心象風景を映し出し、どうしようもない悲しみや憂鬱、倦怠感といったものが重ねて表現されています。

展示1では、中也の詩の中に登場する様々な「空」の姿を紹介しました。



## 展示2 「空」と幻想

中也の詩のなかには、〈空は死児等の亡霊にみち〉(含羞)、〈空の 中に、／黒い 旗が はためくを 見た〉(曇天)といったように、幻想を「空」に見るといった作品があります。

中也は「空」という、常に自分の上になりながら隔絶した世界に、生の根源的な不安や苦悩を反映し、〈死児等〉や〈黒い旗〉といった幻想を通して表現していると考えられます。

展示2では、幻想的な空の風景に着目しながら、中也が「空」に何を見いだしていたのかを探りました。



## 展示3 「空」と祈り

中也は、詩の中で「空」に向かって自己の苦しみを嘆いたり、懺悔したり、神を呼んだり、様々な感情を吐露しています。中也にとって「空」とは、手が届かない、人知を超えた崇高なもの象徴でした。

展示3では、空に慰めを求め、祈りをささげる中也の心情に迫りながら、宗教的な広がりを感じさせる「空」について考察しました。

## 展示4 「空の歌」を求めて

中也は昭和2年頃、第一詩集の構想をしていた際、「空の歌」や「空の餓鬼」などを題名の候補に挙げていました。のちに刊行した詩集『山羊の歌』の中でも自ら求める理想の境地をへあ、空の奥、空の奥へあ、空の歌、海の歌(憔悴)、〈空の歌、朝、高空に、鳴響く空の歌(いのちの声)〉と空のイメージに求めています。

中也にとって「空」とは、詩的なイメージを投影するスクリーンのような場であり、自己の信念や詩人としての姿勢を象徴する重要なモチーフでもありました。

展示4では、「言葉なき歌」、「憔悴」、「いのちの声」を取り上げ、中也が追い求めた「空」と詩との関係に迫りました。

### 【主な展示資料】

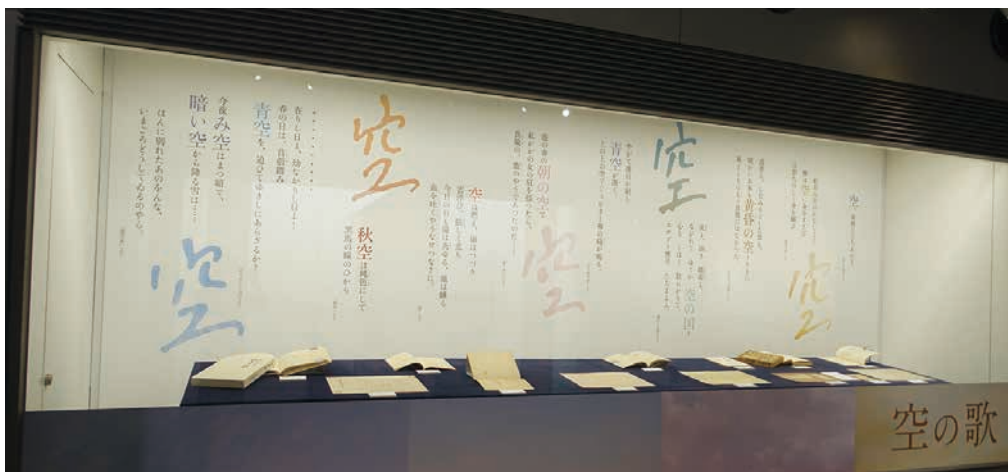
中原中也原稿「含羞」「この小児」「春」「朝の歌」、中原中也「新文芸日記(精神哲学の巻)」「日記(雑記帖)」、「ボン・マルシェ日記」「ノート小年時」「早大ノート」、雑誌「白痴群」、「山羊の歌」校正刷り(いのちの声)



### 固定ケース

## 中原中也、「空」をうたう

ここでは、中也の詩のなかから「空」に関する印象的なフレーズをピックアップし、中也がつむぐ言葉の面白さや奥深さを紹介しました。



草野心平と  
中原中也

会期

令和5年7月27日(木)～10月1日(日)

協力

いわき市立草野心平記念文学館

KUSANO SHIMPEI  
NAKAHARA CHŪYA草野心平と  
中原中也協力：いわき市立草野心平記念文学館  
主催：公益財団法人山口市文化振興財団

中原中也記念館

「蛙」をモチーフとした詩で知られ、令和5年に生誕120年を迎えた詩人・草野心平。昭和9年、心平と中原中也は、同人誌「歷程」の朗読会で出会い、以後交友を結びます。中也は心平らが発行した「歷程」の同人となり、また

中也が詩集『山羊の歌』の装幀を高村光太郎に依頼する際、仲介したのが心平でした。中也にとって心平は個人的につきあいのある数少ない詩人の一人であり、また互いの詩を高く評価し合う、良き理解者でもありました。

本展では、いわき市立草野心平記念文学館協力のもと、心平と中也との深い交友と、心平の詩の魅力について紹介しました。

展示1  
文学の源流

草野心平は明治36年、現在の福島県いわき市に生まれました。中国の嶺南大学留学中に詩を書き始め、亡兄・民平との合本詩集『廢園の喇叭』を皮切りに次々に謄写版の詩集を制作します。帰国後の昭和3年には、『蛙』だけをテーマにした詩集『第百階級』を発行。心平にとって初の活版印刷で、事実上の第一詩集とされています。

一方、中也は山口市の中原医院の長男として生まれ、高橋新吉の『ダダイスト新吉の詩』に影響を受けて詩作を開始し、詩人を志して上京しました。

展示1では、生い立ちや境遇の違いなどを比較しながら、二人が出会うまでを紹介しました。

## 【主な展示資料】

中原中也「ノート1924」、草野心平詩集『第百階級』、草野心平『第百階級』原稿

展示2  
心平と中也の交友

心平は同人誌「歷程」の発行を企画し、それに先立って開かれた「歷程」主催の詩の朗読会に出席した中也は「サーカス」を朗読。心平は中也の人柄と朗読に魅了され、以後二人は、深い交流を結びます。心平は、ラジオや朗読会で中也の詩を朗読したり、『山羊の歌』が発行されると書評を書くなど中也の詩の紹介にともなっていました。中也も「歷程」が創刊されると同人となり、心平の詩集『母岩』の書評を書いています。中也が亡くなった際には、心平は「文学界」や「歷程」の中也追悼号に追悼の詩や文章を寄せ、その後も折に触れて中也についての文章を記しています。

展示2では、交友の様子を通して、詩人として信頼し、高く評価し合う二人の密接な関係に迫りました。あわせて、心平が朗読した「サーカス」の音源が聴けるコーナーや、心平の書、絵画、愛用品を展示するコーナーなども設置しました。

## 【主な展示資料】

中原中也旧蔵草野心平名刺(帝都日日新聞社時代)、雑誌「歷程」、中原中也原稿「董女」、草野心平書「空間」、草野心平遺品(地球儀、硯箱、パステル 他)、草野心平の画・書





### 展示3

## 共鳴する感性 異なる表現

中也と心平は、詩において理論や観念ではなく、言葉になる前の感動や感覚を重視し、言葉の表面的な形式や枠にとらわれずに、生命の底から歌い上げるものとしてとらえています。詩人としての立ち位置も、権威や派閥を好まず、「詩壇」も世俗的なものとして敬遠し、当時の詩の主流からは離れたところで、独自の詩世界を作り上げました。一方で、二人の詩における表現のあり方は全く異なっています。

展示3では、二人の詩や評論の比較を通して、心平と中也の感性の共通点と詩の表現の違いを深く掘り下げました。

#### 【主な展示資料】

草野心平原稿「勝手なコーラス」おたまじゃくしたち四五匹、中原中也「新芸芸日記（精神哲学の巻）」、中原中也原稿「芸術論覚え書」

### 展示4

## 草野心平の詩の世界

中也の死後も、居酒屋やバーを経営するなど様々な職業を転々としながら創作活動を続けた心平。生活の厳しさの中で、「蛙」をモチーフとした詩をはじめ「富士山」「天」ほか様々なテーマを、生命力あふれる言葉と宇宙的な広がりをもつ世界観で描き出しました。

展示4では、85歳で亡くなるまで旺盛に活動し続けた心平の詩の世界を広く紹介しました。

#### 【主な展示資料】

草野心平詩集「富士山」「大白道」「日本沙漠」「自問他問」、草野心平原稿「合唱演奏会に寄せて」、上智大学グリーククラブ第18回定期演奏会プログラム



# 中原中也と関東大震災

令和5年4月19日(水)～7月23日(日)

大正12年9月1日、マグニチュード7.9の大地震が関東地方を襲います。この関東大震災は首都圏に甚大な被害を与え、人々の暮らしや文化に大きな変化をもたらしました。中原中也是京都に住んでいたため被災することはありませんでしたが、約1年半後に上京し、復興期の東京で生活しました。

令和5年は関東大震災から100年目にあたります。本展では、当時の状況や文学者・中也の周辺人物の被災体験、災害から生まれた文学などを通じて、文学の背景にある震災の影響を探りました。



## 関東大震災

関東大震災は、死者・行方不明者約10万5千人という大きな被害をもたらし、未曾有の大災害となりました。被害の多くは火災によるもので、東京・神奈川の広い範囲が焼け野原と化しました。近代化した都市が崩壊し、混乱した社会において、既成概念の否定や破壊を掲げるダダイズムなどの前衛思想に目が向けられるようになります。

ここでは、震災の状況を伝える当時の雑誌や絵葉書、震災によって変わりゆく社会について紹介しました。



## その頃の中也

当時、中也は16歳、立命館中学の3年生で、京都に暮らしていたため、関東大震災には遭遇していません。しかし、中也が京都で経験したふたつの大きな出会いには、この震災の影響があったといえます。京都には東京から逃れた多くの人々が移り住

みましたが、のちに中也の恋人となる長谷川泰子もそのひとりでした。また、中也は京都の古本屋で手にした高橋新吉の詩集『ダダイスト新吉の詩』から強い影響を受けますが、その背景には震災後のダダイズムの広がりがうかがえます。

ここでは、関東大震災と同時期中の中也の動向や詩などを紹介しました。

## 中也が過ごした復興期の東京

大正14年春、中也は泰子とともに上京します。関東大震災から1年半が経ち、東京では復興に向けた工事が急速に進められていました。よく知られた18歳頃の中也の肖像写真は、その頃に撮影されたものです。以後、中也は約12年間を東京で生活しますが、その時代は、ちょうど東京がめざましい変化を遂げた時期に重なります。

ここでは、中也が見つめた復興期の東京について紹介しました。



## 関東大震災と文学

震災後、多くの文芸誌は文学者による体験記を掲載し、震災特集号として発行されました。また、震災をうたった詩集や歌集が発行されるなど、関東大震災を題材にした文学作品が生まれました。それらは、この大災害が人々の心にどのような爪痕を残したかを伝える文学的な記録でもあります。

ここでは、震災直後に発表された文学者の体験記や、詩を紹介しました(室生犀星「日録」、芥川龍之介「大震雑記」、西条八十「Night」、生田春月「暗を行く電車」、金子光晴「東京哀傷詩篇」)。

### 【主な展示資料】

中原中也原稿「想像力の悲歌」その頃の生活、中原中也18歳頃の肖像写真、関東大震災関連雑誌(改造)第5巻第10号、「中央公論」第38年第11号など、絵葉書集「大正十二震災実況画はがき第壹輯」、詩話会編「震災詩集 災禍の上に」、飯尾謙蔵編「散文・詩集 噫東京」、「フォトタイムス」第6巻第12号



# 中也と短歌

令和5年10月4日(水) 1  
 令和6年4月14日(日) 2

山口では少年歌人として活躍した中也でしたが、その後、京都の中学校に転校し、本格的に詩作に取り組みようになってからは、短歌は数えるほどしか制作していません。しかし、歌を詠んだ経験は、のちの詩作にも大きな影響を与えています。

本展では、中也の短歌の紹介をはじめ、山口の歌壇との関わりや、中也の短歌観がわかる文章などを通じて、中也と短歌の関係について探りました。

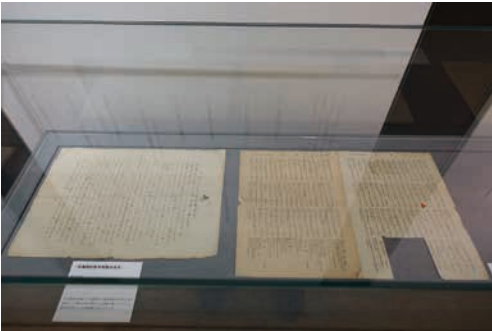


## 展示1 中也の短歌 —12歳から15歳まで

大正9年2月、中也自作の短歌が雑誌に掲載され、間もなく地元の新報にも掲載されました。中学校入学後は歌作を一時中断しますが、2年生の夏休みに歌作を再開。そして3年生の時、合同歌集『末黒野』<sup>すくみの</sup>を刊行しました。ここでは、現存する中也の短歌の九割以上を占める、中学時代に制作された短歌を紹介しました。

## 展示2 その頃の中也

中也が短歌を発表した期間は、12歳から16歳までの約3年間です。中学入学時の成績は上位でしたが、間もなく成績が落ち、両親や教師に反抗的な態度を取ることもありました。そこで、教頭の家に移住したり、寺に修養に行かされたりしましたが、成績は元に戻らず、結局中学3年で落第。山口を離れ、京都の立命館中学に編入しました。



ここでは、中也が文学に目覚めるきっかけをつくった教生との交流や、山口の歌会と中也の関わりなどについて紹介しました。

## 展示3 中也の短歌 —思い出の地を詠む

中也が幼い頃住んでいた広島・金沢など、思い出の地を詠んだ歌があります。ここでは、そのような歌を集めて紹介しました。

汽車の窓幼き時に遊びたる饒津神社の遠くなりゆく

中也は父の仕事の都合で1歳から約3年半の間広島に住んでいました。この歌は汽車の車窓から見えた広島風景を詠んだ歌です。

## 展示4 中也の短歌観

昭和11年発表の評論「新短歌に就いて」において、中也は短歌・俳句・新短歌をまとめて「呼吸詩歌」と名付け、それらは「生活の傍らのもの」としては意義あるものにとらえています。しかし、中也にとつての理想の芸術は「生活の傍らのもの」ではなく「その中で生活の出来る詩歌」とあるといえます。そして、その理想の実現には、「呼吸詩歌」よりも新体詩、すなわち現在我々が詩と呼んでいる形式が適している結論づけています。

ここでは、中也の短歌観について、中也が執筆した評論やアンケートを通じて紹介しました。

## 展示5 中也の短歌 —晩年の短歌五首

中也にとつて最後となった短歌は、昭和12年2月頃に制作された5首です。これらの短歌は病院に入院中、日記兼雑記帖として使っていたノートに記されたものです。当時中也には、詩人としての転機に立っている実感があつたようですが、短歌からは、その転機を入院しているために十分生かして切れないという焦りが感じられます。ここでは、中也が晩年に制作した短歌について紹介しました。

## 展示6 詩人・中也と短歌

なぜ中也は短歌から詩に創作の場を移したのでしょうか。その理由がうかがえるのが昭和9年発表の評論「詩と其の伝統」です。ここで中也は、短歌・俳句は詩心を一度しか指示(暗示)できないが、詩ならば何度も繰り返し指示することが出来る可能性がある。そして、時勢が短歌・俳句ではなく、詩でしか表現し尽くせないところに来つたつととして、現代における詩の必要性を説いています。ここでは、「詩と其の伝統」を中心に、詩人・中原中也にとつて短歌とはどのようなものであつたのか、ということについて紹介しました。

## 展示7 中也の短歌—全116首

中也が残した短歌全116首を展示し、展示をご覧いただいた方に、好きな短歌を選んで投票してもらおう人気投票を実施しました。

入館者80万人達成！

2023年9月18日、中原中也記念館の入館者が80万人に到達し、記念セレモニーが開催されました。

開館から29年と7か月、コロナ禍で来館者の減少もあり、70万人達成から5年8か月での突破となりました。

80万人目のお客様は、福岡県在住の山下仁美さん。職員から拍手で迎えられ、福田百合子名誉館長から記念館のオリジナルグッズが贈られました。

山下さんは中学生のころから中也の詩に興味があったそうで、記念館へは念願の初来館となりました。「中也の作品の魅力は、感受性豊かで繊細なところだと思います。いろいろな展示を楽しみながら見させてもらって、中也と作品を感じたいです。」と話されました。

開館30周年の盛り上がりを感じさせるような、嬉しいイベントとなりました。



第8回ぼうしの詩人賞

くあつまれ！未来の中也たち！

「ぼうしの詩人賞くあつまれ！未来の中也たち！」は山口市内の小・中学生が「中原中也」や「詩」に触れる機会をつくるために、平成28年に創設された創作詩のコンクールです。今回は第8回を迎え、268篇の応募作品の中からぼうしの詩人賞（最優秀賞）1篇、優秀賞4篇、館長賞6篇が選ばれました。

12月9日に表彰式、作品朗読会をクリエイティブ・スペース赤れんがで開催しました。表彰式後、朗読を好んだ中也にならない、それぞれが自作の詩を自分の声にのせて表現しました。

毎年、小学生から中学生へ成長する子どもたちならではの視点に驚かされます。自分の内面を見つめ、他者や周囲の環境を観察し、解釈し、そして言葉にして表現する。詩に親しんだ経験が、小さな詩人たちの心に広がり続けるよう願っています。

※記念館WEBページにて、過去の入選作品がご覧いただけます。



ぼうしの詩人賞・最優秀賞

石田 雅道

優秀賞

田淵 陽仁

中内 咲耶

浅野 陽佑

有吉 みなみ

館長賞

清水 秀剛

柴田 陽々登

田中 莉咲

加藤 千織

庄司 ルカイヤ

又野 衣織



中也忌

当館では毎年、10月22日の中也の命日前後に「中也忌」と称してイベントを行ってきましたが、中也の命日86回目の今回は、4年ぶりに「墓前祭」を開催しました。中也のお墓に集った方々とさわやかな秋空の下、中也の詩「一つのメルヘン」を献詩、そのあと献花を行いました。

そのほか、週末にかけて記念館の中庭で開催された山口市立大学の学生による「メイス交換会」は、中也を知ってほしい・自身も知りたいという有志の学生の集まりで、多くの来館者が中也の好きな一節をもち寄り、参加しました。狐の足あとのカフェメニューコラボやYouTube配信などあらたなイベントも企画し、中也に思いを馳せるあたたかなイベントとなりました。







中原中也記念館開館30周年記念事業  
シンカする中原中也記念館

中原中也記念館は、開館から30年、80万人以上の方に「来館」いただいています。年月が経ち、山口・湯田温泉の風景になじんできました。

詩人・中原中也とその作品を多角的に紹介し、「文学」や「詩」という枠にとらわれず、展示をはじめ、資料の収蔵や様々なイベントを積み重ねてきた、深化する記念館！

時代の流れや要請に応じて、YouTube配信やデジタルアーカイブ、音声ガイドを整備し、進化する記念館！

まだ訪れていない人にも、常連の方にもぜひ、あなたの知らない中原中也や文学館の「真」の「価」値を体感していただける機会となるよう、これからもさまざまなチャレンジを続けます。

来館ポイントカードで5つの展示をコンプリート！

いつ来ても、中也と中也作品の新たな魅力を発見していただきたい……。

開館30周年期間中にある展示の観覧回数に応じて記念館から皆様へプレゼントをご用意しました。展示ごとに異なる中也の魅力をあじわってください。



Tシャツデザインコンテスト

開館30周年を記念して製作するTシャツのデザインを募集しました。テーマは「中原中也の詩」。461の応募作品の中から、最優秀賞2点、優秀賞2点、佳作5点が選ばれました。長年の中也ファンの方や、この企画をきっかけに中也の作品に触れた方もいらっしやうです。年齢も幅広く10〜80代の全国のみなさんからご応募いただき、多様な表現を見せていただきました。

最優秀賞に選ばれたデザインは、開館30周年記念グッズのTシャツとして4月より販売します。

※詳細はQRコードよりご覧いただけます。



優秀賞



onsa (東京都)



山内 久 (青森県・66歳)

佳作 5 作品



最優秀賞



「中原中也」人生の色  
重岡 千鶴 (福岡県・36歳)



CIRCUS  
Tatsuya Watanabe / BORIS (神奈川県・35歳)



穂村弘氏公開講演

「中原中也をはじめとする詩人たちの短歌」

歌人の穂村弘さんをお招きして、企画展Ⅱ「中也と短歌」にあわせて、中也の文学的出発点であった短歌をテーマとした講演会を開催しました。詩人をはじめとする文学者の短歌作品は初めて読むものも多く、作者の視点や作品との向き合い方を語る穂村さんの巧みなお話に時折笑い声があがりました。約200名のご来場があり、2月18日開館30周年の記念日になさわしい、スタートダッシュのイベントとなりました。

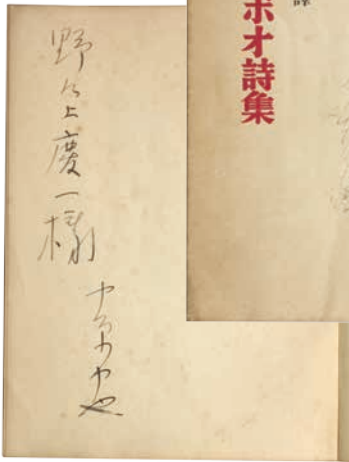


野々上慶一宛献呈署名入り  
翻訳詩集『ランボオ詩集』

野々上慶一関連資料等39点を、ご子息の一郎氏より受贈しました。野々上慶一（1909―2004）は中原中也の友人で、中也の第一詩集『山羊の歌』を刊行した文圃堂書店の店主です。

野々上は中也との交友を数々の随筆に書き残し、その一部は『中也ノオト―私と中原中也』（かまくら春秋社）にまとめられています。野々上の文章からは、青春をともし、早世した友人への慈愛に満ちたまなざしが感じられます。

この度ご寄贈いただいた献呈署名入りの『ランボオ詩集』について、野々上自身が次のように書いています。（私にとって、唯一大切にしている、かけがえのない中也の遺品といえるものであります）（野々上慶一「鎌倉と中原中也」）。

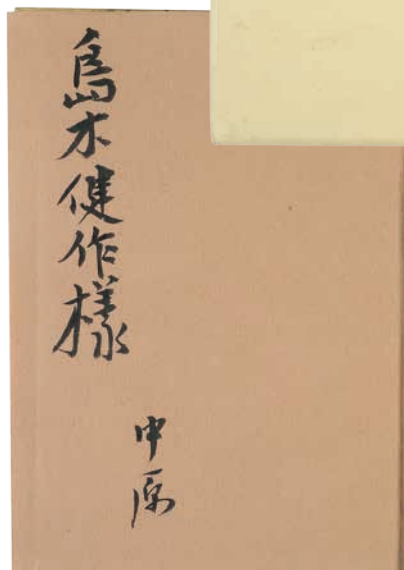
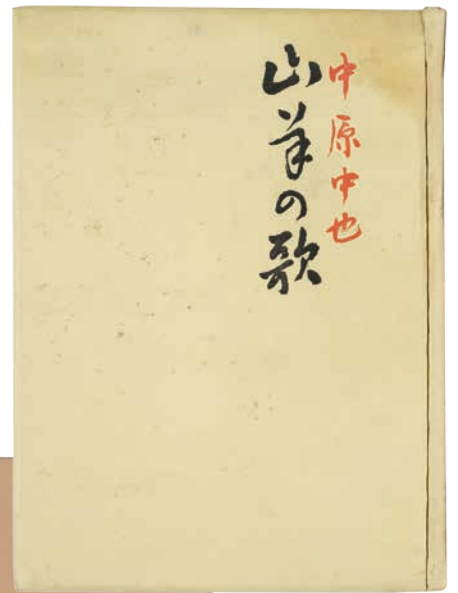


中原中也  
山羊の歌

島木健作宛献呈署名入り  
詩集『山羊の歌』

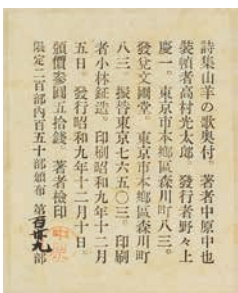
中原中也の会第28回大会（令和5年9月9日開催）で講演された川島幸希氏（秀明大学学長）から、その場で中原中也の会を通じ当館に寄贈された資料です。奥付の記番は「第百卅九（139）部」で、見返しの遊びに「島木健作様 中原」という献呈署名が墨で書かれています。

島木健作（1903―45）は『生活の探求』『赤蛙』などで知られる小説家で、中也が多くの詩を発表した雑誌「文学界」の同人でした。中也が鎌倉に暮らした昭和12年当時、同じ鎌倉の雪ノ下に住んでいました。同年5月11日の中也の日記に初めて島木を訪ねたことが記されている他、「文学界」中原中也追悼号に発表された島木の「追悼」には、その後も何度か中也の訪問を受けたことが書かれています。



この『山羊の歌』は、そうした交友の中で島木に贈られたものと思われ、苗字のみであるところが他の署名とは違ってきます。

同資料は、川島氏の講演会会場で来場者に展覧され、同年の11月29日から12月10日にかけて開催された『山羊の日』特別展示で一般公開されました。





2023年 4月1日	特別展示 震災復興応援企画(前年度から継続) 当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介  温泉街の朗読会(～2日) 湯田温泉白狐まつりのイベントとして共催実施	8日	プロムナード・トーク① 企画展Ⅱ解説
19日	企画展Ⅰ「中原中也と関東大震災」(～7月23日)	20日	中也忌関連イベント 狐の足あとのコラボ企画(～22日) ノベルティグッズプレゼント、記念カフェメニュー提供
26日	特別展示 第28回中原中也賞(～5月28日)	21日	中也忌関連イベント メイシ交換会(～22日) 共催：山口県立大学「中原中也メイシ交換会運営委員会」
28日	第223回 中原中也を読む会 第28回中原中也賞受賞詩集 青柳菜摘『そだつのをやめる』を読む  生誕祭関連イベント 狐の足あとのコラボ企画(～30日) ノベルティグッズプレゼント、記念カフェメニュー提供	22日	中也忌 経塚墓地(吉敷)で一般参加を募った墓前祭、中也へのメッセージ お供え  開館30周年関連イベント 「2024年開館30周年を迎えます」YouTube配信②
29日	生誕祭「空の下の朗読会」(ホテルニュータナカ) 自由参加の朗読会、GOMESSライブ  第28回中原中也賞贈呈式(かめ福オンプレイス) 受賞詩集：青柳菜摘『そだつのをやめる』 記念講演「中也の風、朔太郎の白」 講師：萩原朔美 主催：山口市、(公財)山口市文化振興財団	27日	第229回 中原中也を読む会 企画展Ⅱ見学
5月26日	第224回 中原中也を読む会 企画展Ⅰ見学	11月24日	第230回 中原中也を読む会 屋外展示「友への詩」(後期)を読む
6月23日	第225回 中原中也を読む会 屋外展示「友への詩」(前期)を読む	29日	「山羊の日」特別展示 島木健作宛献呈署名入『山羊の歌』(～12月10日)  第8回「ぼうしの詩人賞～あつまれ！未来の中也たち！～」入選作品展 示(～2024年1月28日)
7月27日	特別企画展「草野心平と中原中也」(～10月1日) オープニングセレモニー開催	12月9日	第8回「ぼうしの詩人賞～あつまれ！未来の中也たち！～」 (クリエイティブ・スペース赤れんが) 表彰式・入選作品朗読会
28日	第226回 中原中也を読む会 中原中也の日記と手紙を読む	22日	第231回 中原中也を読む会(山口情報芸術センター[YCAM]) 福田百合子名誉館長と中也の詩を読む  開館30周年関連イベント 「2024年開館30周年を迎えます」YouTube配信③
8月6日	開館30周年関連イベント 「2024年開館30周年を迎えます」YouTube配信①	2024年 1月7日	プロムナード・トーク② 企画展Ⅱ解説
13日	プロムナード・トーク① 特別企画展解説	26日	第232回 中原中也を読む会 現代詩人・田村隆一の詩を読む
19日	特別企画展関連イベント 朗読&トーク「心中、詩スルモノアリーいきかえるうた」 (クリエイティブ・スペース赤れんが) 出演：桑原滝弥	2月15日	第21回テーマ展示「空の歌」(～2025年2月11日)
25日	第227回 中原中也を読む会 特別企画展見学	18日	開館30周年  開館30周年記念事業 Tシャツデザインコンテスト入賞作品発表  開館30周年記念事業 公開講演「中原中也をはじめとする詩人たちの短歌」 (湯田温泉ユウベルホテル松政) 講師：穂村弘
31日	機関誌「中原中也研究」第28号発行	23日	第233回 中原中也を読む会(山口情報芸術センター[YCAM]) 蓄音器で聴く中也ゆかりの音楽
9月9日	公開講演「署名本の世界—中原中也と四季派の詩集から」 (ホテルニュータナカ) 講師：川島幸希 共催：中原中也の会	3月9日	開館30周年記念事業 創作ワークショップ「1首つくり終わるまで出られない短歌教室」 (山口情報芸術センター[YCAM]) 講師：木下龍也
18日	入館者80万人達成・記念セレモニー	22日	第234回 中原中也を読む会 テーマ展示見学
22日	第228回 中原中也を読む会 近代詩人・伊東静雄の詩を読む	30日	プロムナード・トーク③ 企画展Ⅱ解説
23日	プロムナード・トーク② 特別企画展解説	31日	館報第29号発行
10月4日	企画展Ⅱ「中也と短歌」(～2024年4月14日)  中也忌関連イベント 中原中也へのメッセージ募集(～21日)		

中原中也の会

2023年 5月27日	中原中也の会第26回研究会「草野心平と中原中也 一詩における生活意識とは何か」 (神戸女子大学教育センター) 総合司会：たかとう匡子 講演「中也と心平」 講師：近藤洋太 鼎談「近藤洋太氏の講演を受けて」 パネリスト：季村敏夫、倉橋健一、佐々木幹郎	9月9日	中原中也の会第28回大会 (ホテルニュータナカ) 総合司会：カニエ・ナハ 講演Ⅰ「署名本の世界—中原中也と四季派の詩集から」 講師：川島幸希 講演Ⅱ「中原中也の無邪気と邪気」 講師：高橋伴明 インタビュアー：カニエ・ナハ
7月31日	会報第54号発行	10日	中原中也の会第22回セミナー (ホテルニュータナカ、中原中也記念館) 講演「心平のような蛙の詩はもう創れないのか？」 講師：田原義寛 閉き手：原 明子 中原中也記念館特別企画展「草野心平と中原中也」見学
		2024年 1月31日	会報第55号発行

# 第29回中原中也賞

## 『渡す手』



撮影：野村佐紀子

さとう あやか  
佐藤 文香氏

粉のような草花が、そのあたりに近景も遠景もなくございます、その一帯は私という存在よりも上位であることを提示し続ける、差し入れた腕が掠れるようなことにもやはりなるほどと、一抹の恐縮が灯る。

世界は、と言ひ、その音のうち愛を取り出したあとに咳く、唇を手の甲におしあてて離すと、なにもかも話し終えたあとのように息が肺の底へ降りてくる。そこへ松明をかざしに、小さな方たちはいらつしやる。

摘んできたものを珍しいから咲かせるとがんばって、養分を買いに行くはずのあなたがシンクをよぎり、昼に掠れた私の腕を、しかとあるもののように抱きにきた。小さな方たちは左に寄り、私の内膜へ触れて湿らせた手で、松明を握り消す。

第29回の中原中也賞は、公募および推薦による240詩集の中から、佐藤文香氏の『渡す手』（思潮社）が選ばれました。

佐藤文香氏は昭和60年生まれの38歳（受賞時）。平成10年に兵庫県神戸市から愛媛県松山市に転居し、翌年俳句を始め、『海藻標本』『君に目があり見開かれ』などの句集を発表しています。書籍の編集協力、作詞など日本語詩に関する幅広い活動を行う中で、表題作を含む24篇の詩を収めた第一詩集『渡す手』を刊行し、今回の受賞に至りました。

佐藤詩集（『渡す手』）は各篇にスタイルの一回性を感じられ、言葉のセンスの高さ、自在さが注目された。良くも悪くも、定型詩である俳句の作者として培われてきた言語感覚が現れている。「縦の感覚」「花筏」「行くということ」などの作品に作者の特徴が出ていて、言葉に関する引き出しを多く持っている書き手であると思われる。そこに、今後の展開も含めて期待が集まることとなった。

〔選評〕より



〔渡す手〕より

### 2024（令和6）年度 記念館事業・関連行事予定

### 2024年4月-2025年3月

#### 展示

- 企画展Ⅱ  
「中也と短歌」  
(2023年10月4日～2024年4月14日)  
第21回テーマ展示  
「空の歌」  
(2月15日～2025年2月11日)  
企画展Ⅰ  
「ダダイスト中也のノート」  
(4月17日～7月28日)  
特別企画展  
「中也とランボー、ヴェルレーヌ」  
(8月1日～9月23日)
- 企画展Ⅱ〔前期〕  
「浅田弘幸展  
—『眠魂』と中也、そして新作絵本」  
(9月26日～2025年1月26日)  
企画展Ⅱ〔後期〕  
「原田和明のオートマタと  
中原中也」  
(2025年1月29日～4月13日)  
第22回テーマ展示  
「中也の手紙」(仮)  
(2025年2月14日～2026年2月中旬)

#### イベント・記念日

- 湯田温泉 白狐まつり  
(4月6日、7日)〈無料開館日〉  
生誕祭「空の下の朗読会」  
(4月29日 中原中也記念館前庭)〈無料開館日〉  
中也忌  
(10月22日)〈無料開館日〉  
山羊の日(第1詩集『山羊の歌』刊行日)  
(12月10日)  
開館31周年  
(2025年2月18日)〈無料開館日〉

#### 中原中也を読む会

毎月 第4金曜  
中原中也記念館ほか

#### 中原中也の会

中原中也の会第27回研究集会  
(6月30日 國學院大學院友会館)  
中原中也の会第29回大会  
(9月7日 かも福オンプレイス)

※日程等、変更の場合もございます。